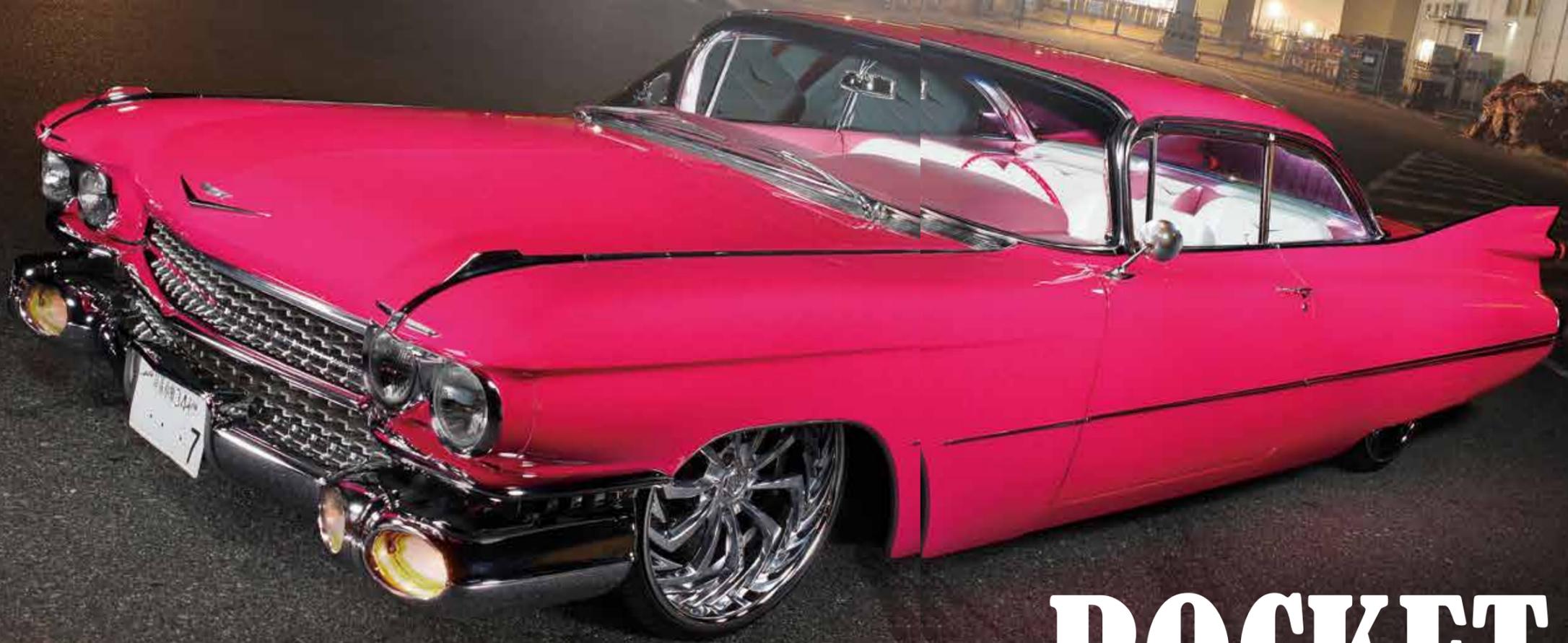




MODERN PINK CADDY



ROCKET DIVE

1959 CADILLAC COUPE DE VILLE

text & photographs by MASAHITO HAYASHI
special thanks to GRACE CAB www.gracecab.jp 0568-35-7790 / VISION CORPORATION www.vision-jp.com
owner : MASAHIRO TODA from GRACE CAB < AICHI >





ホイールはLEXANI FORGEDのLC-777 JAGGモデル22インチ。フィニッシュはシンプルにポリッシュ。ブレーキはCPPのキャリパーとドリルド/スリットローターの組み合わせにアップデート。エアサスはワンボディのデジタルユニット「FREEAIR」をセット。メモリーもありながら必要最小限の機能を集約した先端モデルで、コントロールは専用リモコンでもスマホアプリどちらでも可能。



独特の形状をした1959年らしいダッシュパネル形状はそのまま生かしてレザー張りとしている。こだわりのインテリアの中でも、特にゲージはメーカーラインアップには存在しないDakota Digital製の最新HDXをストックのベゼルをベースに特注で製作してセット。ストックのデザインをトレースしながらも、2つのマルチインフォメーションスクリーン、シフトポジション、時計など様々なインフォメーションの正確な表示が可能になっている。デジタルコントロールメーターへの換装は、機能面だけではなく、ルックスも格段にアップ。ヘッドユニットはクラシカルなデザインのBluetooth対応モデルを装着し、使い勝手も現代のシステム同様。



1959 CADILLAC COUPE DE VILLE ROCKET DIVE

MODERN PINK CADDY



ストックのベンチシートをセパレート化は定石となっているが、最近ではアフターマーケットでも良質な汎用セパレートシートが複数存在する。その中でチョイスしたシートをベースに、内部のウレタンも調整、表皮のパターンもカスタムした上で張り替えられている。フルサイズのアメリカ車は意外と広くないものの、シートレールから座面までの全高をナローしたことで、より広い空間に感じられる室内。ドアパネルはベースの素材からすべてワンオフデザイン。センターコンソールも同様にワンオフで製作。昨今のトレンドを反映したインテリアを実現させている。



ボディカラーはクラシカルなサーモンピンクではなく、それを現代っぽく表現してみたかったというイメージでたどり着いたのがこのカラー。キャンディなどを使ったカスタムペイントではなく、色一色のインパクト勝負で攻めたカラーは、光の加減で蛍光ピンクから明るい赤にも見える独特の輝きを放つ。リアトレイもシートからの流れを取り入れ、LEDライティングも備わる。エンブレムやグリル、モールディングやレンズ類など、外装パーツのコンディションも良好な希少な存在。





新たに生を受けた成功の象徴として君臨した'50s Caddy

1940年代後半から1950年代半ばまで、アメリカで大きな成功を収めたアスリート、アーティストらがこぞって愛したPink Cadillac。反映を謳歌した強いアメリカの象徴のような存在で、まさしく成功した証でもあり、後に映画や有名ミュージシャンの楽曲としてもPink Cadillacというワードは単なるピンクのキャデラックではなく、その時代背景も反映した特殊なパワーワードでもある。

当時のキャデラックは、世界に先駆けて最先端の装備を次々に開発、投入。現代で例えるとロールスロイスのような存在だったかもしれない。パワーウィンドウ、パワーステアリングなどの快適装備がこの時代にすでに装備されていたキャデラック。この1959年型はテールフィンが最も巨大化したスタイリングということもあり、まさに強靱だったアメリカの代表格ともいえるモデルだろう。

この1959年型をベースにカスタムに着手したGRACE CABの戸田氏。過去には1960年代のものや、1993-1996年型の通称ビッグプロムにも乗っていた経緯がある中で、やはり最終的にはこの1959年に惹かれて8年ほど前に国内で調達。いつでも乗れるようにナンバーは切らさず、エンジンはBBC390と3速のトランスミッションは当時のオリジナル。しばらくは鍛造ホイールとエアサスのみだったが、ここ1-2年で大きく変貌を遂げている。

無難にホワイトやブラックのカラー候補もあったが、最終的にチョイ

としたのがこのビビットなピンク。往年のPink Cadillacのようなクラシカルなサーモンピンクの当時のオマージュ的なスタイルではなく、このクルマのテーマはカスタム手法からスタイルまで、あくまでも現代的な要素を取り入れることだったので、蛍光感のあるカラーにトライ。

インテリアもそれに倣いセンターコンソールにセパレートシートというモダンなカスタムを取り入れて、ゲージはDakota DigitalのHDX特注モデルを装着。キャデラック用のラインアップはシボレー系などと比較すると極端に少ないが、このような特注での製作が可能なのも嬉しいところ。

クラシックなルックスのステレオユニットもBluetooth対応のモデルをセット。インテリアはダッシュはストックのデザインをそのまま生かし、シートはアフターマーケット製のセパレートシートをベースに、オリジナルパターンで製作。シートレールの全高も大径ステアリングを考慮して極力低くモディファイしており、乗降性にも配慮。LEDライティングでさらにストックとは別世界の空間を演出している。

ペイント、エアサス、インテリアのカスタムと続き、これだけでも十分なインパクトながらも、ゆくゆくはトータルで仕上げるための通過点に過ぎないという。クラシックの中でも最高峰のキャデラック。それをベースにエンジン、トランクへとカスタムの構想を練るオーナーは、まさに現代のPink Cadillacに相応しい。

ROCKET DIVE

1959 CADILLAC COUPE DE VILLE

MODERN PINK CADDY

